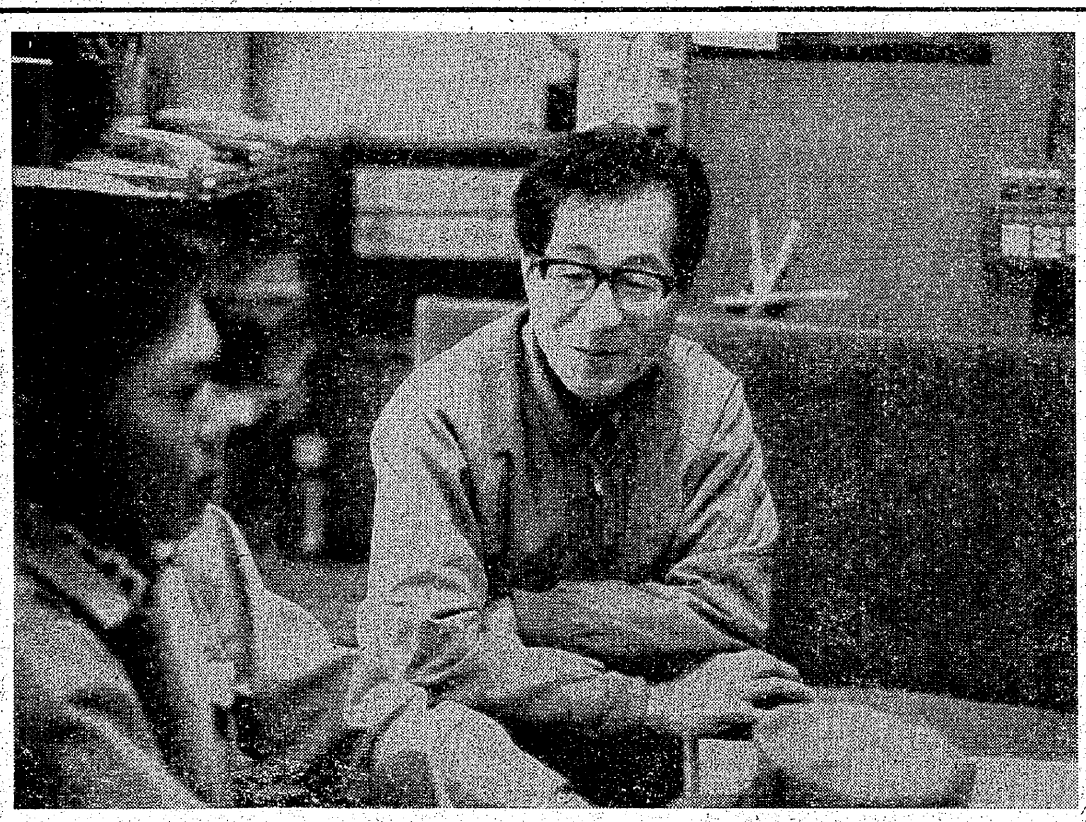
# 原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百八号

## 原告団レポート

### CO患者――松岡　聖さん



訪ねてくれた患者仲間の小川さん（原告団々長）と語り合う松岡さんの表情は、ことのほか優しそうだつた。が、まつたく筋の通らぬことで感情を爆発させ、妻の藤子さんを手こずらせることが決して少くない。「CO患者の家はどこも同じとあきらめています」、とは妻の藤子さんの話である。

# 大斜坑に積もる炭じん

## 忘れぬ、三井への怒りをぶちまけた若い保安監督官

## 今も後遺症に苦しみながら

### 家族と共に

松岡聖さん。

生年月日――大正三年十一月二十九日。六十三歳。三川鉱を定年のため退職したあと、大牟田市大字歴木、高泉団地県住千二百棟三班四階に居住。長く住んできた小浜町の三川鉱北社宅二十棟を引き払い、ここへ越してきたのは四十七年の二月ごろのこと。

松岡さんは、長く住み続けてきた北社宅近く、小浜町通りに小さな電気器具店を出している。どうひいき目に見てもにぎわっているふうには思われないが、毎日午前十時前後から夕方の七時ごろまで開けている。高泉団地の住まいがらの通い営業。社会に適応するための自主訓練が目的だとのこと。

家族は、次の五人。

妻の藤子さん。五十四歳。夫の松岡さんが出している店のすぐ近くの手塚製メン工場で働いている。

ここに働くようになってから十年になるが、結婚は昭和十八年十二月二十六日。松岡さんが二十八歳で、藤子さんが十九歳のときだった。早や三十五年も二人で生きてきたことになる。

長女はれい子さん。三十三歳。以前名古屋で働いていたが、数年前に大牟田に帰り両親とともにくらしている。父親の店の支え手。

次女は和子さん。三十歳。名古屋で働くうちに結ばれ、彼の地でくらしている。すでに子どもが一人。

長男は成一さん。十七歳。名古屋の一企業で働いている。

それに、八十四歳という松岡さんの実母のみえさんがいる。まだ達者で、ちょっとした家事の手伝いぐらいはできる。もっとも毎日松岡さん夫婦に、長女れい子さんが出払ってしまうあとの留守番を過去五年間、ちゃんとやり遂げてきた。

### 残る後遺症

松岡聖さんは、実はCO患者である。もっともすでに二十万円そこそこの一時金とひっかえに、心なき政府から労災補償を打ち切られた身だから、会社にいわすればもはやCO患者ではない、ということになる。でも四十四年の十一月二十八日定年のために退職したあとでさえ、例にもれず後遺症に悩まされながらの生活だ。

右足の感覚がにぶい。何かの拍子で、体がふるえ出す。どうかすると、左足がきゅーっとひきつってきて硬直する。何とも表現のしようがない頭痛が襲いかかってくることがある。こんなときは「自分はこのまま気が狂ってしまうのではないか」、とさえ思われてきて、そのため月に二回くらいは店を休むことが通例になっている。

いっこうに、物忘れもとれぬ。人からテレビの修理など頼まれては、車のハンドルをにぎってスタートしたまではよいものの、そのうち「はて、自分はいったいどこへゆくつもりだったのか」、かんじんのゆく先を忘れ閉口してしまうことがめずらしくない。長女れい子さんのささえがなかったならば、小さな今の店さえ果たして今まで持ちこたえることができたかどうか。

### 思わぬ被災

松岡さんは坑内電気工だった。三川鉱入社は十五年十月五日。熊本の電気講習所を卒業したベテランで、本来の仕事は同鉱大斜坑（大爆発の中心点だった）の電気関係の施設や電車の補修など。それが三池闘争後になると、今日はケーブルひっぱり、明日はスイッチ座運搬、明後日は切羽電気への応援と、一転してルンペン作業へ。その朝繰り込み場にいって見ないことには、自分のやる仕事がさっぱりわからなかった。

それでも松岡さんは、職場分会や地域分会などの役員をしながら屈することなく、仲間とともに闘い続けた。そのあげくが、あの三川鉱炭じん大爆発での被災だったのである。

同鉱の三百五十メートル坑道二十一卸材料線に瀕死の状態で倒れているところを、さいわい同じCO患者で今曙病院入院中の早川静夫さん（63歳。当時三交代仕繰夫）らの手で救出され、助かった。

「とにかくビンタをはって目を覚させたり、体をマッサージしたり。うっかりすると眠ってしまうから、またビンタ。眠る、ビンタ。眠る、ビンタのくり返し。あの人が助かったのは不思議でした」

早川さんは述懐するが、そのとき長女れい子さんこそ世に出ていたものの、次女の和子さんが十六歳で高校一年、ひとり息子の成一さんが十三歳で中学一年、それに年老いた松岡さんの実母のみえさんを抱えていたのだったから、妻の藤子さんにすれば、いっぺんに目の前が真っ暗になったのも当然だったろう。

### ささえる人

身を削る藤子さんの労働が始まった。子どもたちにだけは人並みに勉強させたい一心からではあったにもせよ、藤子さんは毎朝八時から夜の八時まで十二時間、袋貼りの仕事にでかけ、仕事がすんで家に帰ると、こんどは夕食もそこそこに夜なかの十二時まで旅館の皿洗いの仕事に。「ばあちゃんもいまの子どもは学校にだけはやってあげないと、と必死にささえてくれたので助かりました」とのこと。

だが、それにもまして、当時すでに世にでていた長女れい子さんが、次女和子さんの学資だけはと、毎月欠がさず黙って仕送りしてくれたことがどれほど大きなささえとなったことだったか。そのれい子さんは、いまは、父親松岡さんが営んでいる店にとって、何はさておき絶対に欠くことのできないささえ手となっているのである。その後、同店近くの製麺工場に転じて働き続けている母親藤子さんとともに。

### 会社の陰謀

松岡さんは、いったん罹病してしまったCO中毒症は生涯治ることがないことを十分知っていながら、何とも表現しようのない後遺症が苦しいばかりに、しきりに店近くの某針灸治療所に通っている。針打ちにマッサージ。その必要治療経費は、しめて月にほぼ七、八千円は下らぬ。国民健康保険を利用しても、それが保障してくれる範囲といえばしれたものだ。

もっとも、労災補償を打ち切られたCO患者にはアフターケヤーという治療補償の道（それも三池労組が団結の力で勝ち取ったもの）がないではない。でも、「アフターケヤーに頼っているばかりでは体の調子を維持していくことができず、仕方なく金に目をつむって針打ちやマッサージに通わなければならない」（松岡さんの話）現実だ。

いま、松岡さんは三池大災害裁判にすべてをかけている。

三池大災害裁判は、四十八年五月十一日に提訴して以来、すでに公判も二十二回を数える。初めの頃には、三川鉱の大斜坑の揚炭ベルトのうえに、だれかが（といっても明らかに三池労組員を指していた）計画的にダイナマイトを仕かけ、それを爆発させ、あの大爆発をひき起こしたのだ、との主張を押し通うそうとしてきた。

その主張が、さすがに頼む検察側からさえ見向きもされないことがわかると、こんどは一転して言をひるがえし、「あのとき逸走した炭車の火花が、そのためになぎ倒された枠脚でベルトコンベヤーをかすめ、その勢いで、ベルトのうえの原炭のなかの炭じんが舞いあがったところへ着火。そしてあの大爆発になったのだ」と、見えすいた主張を押しだしてきた。責任を逃れる最後の道として会社がからくもつくりあげた陰謀にほかならないことは指摘するまでもなく、第一、あの大爆発のひき金になった重大な数々の事実を、前々からいやというほど見せつけられてきたという、CO患者――松岡聖さんの澄んだ二つの瞳を、どうしてごまかすことができよう。

### 何を見たか

松岡さんが大爆発で被災するまで三川鉱の坑内電気工として、その大斜坑道や採炭切羽などをかけめぐっていたことは前述したが、彼がゆく先々で目撃したものは果たして何だったろうか。彼は語るのである。

×

坑内電気工として、三池闘争前には、あの大斜坑道のいろんな電気施設や電車などの補修が仕事でしたから、いやでもあそこを毎日ひと巡回しなければならない体でしたし、また三池闘争後は、なるほど本来の坑内電気工としての仕事を奪われて差別配役されながらも、草箒や雑布を手に、目貫のスイッチ座や大斜坑道のベルト座の清掃などで、ぐるぐるまわらされました。

いやでも、ひどい保安状況を見ないわけにはいかず、問題の炭じんは、大斜坑道のケーブルのうえなどに、これ以上積れないところまで山型に積っていました。スイッチ座のダクト（ケーブルを布設している溝で、常に蓋がしてある）などにも、いざ清掃しようといって見ますとこれまた粉炭がいっぱいつまっている。だれもが「あの頃大斜坑道を歩くと、ポックリポックリ地下足袋（当時はまだ安全靴は用いられていなかった）の跡がつくほど炭じんが積っていた」、といいますが、まったくその通りだったんです。

私が電気工として、坑内事情に明るかったからでしょうか、まだ三井天領病院に入院しているときのこと、事情聴取のために検察庁から呼び出しを受けましたし、鉱山保安監督局からはわざわざ係員が私の病室にまでやってきて、事実を調べていきました。

とくに監督局からやってきました若い監督官は、「坑内の保安維持のことで、何回改善するように勧告しても、三井は耳を貸そうともしない。だから、こんどは徹底的にやりますよ」、と憤然としていっていた言葉が、いまも耳の底に残っています。

ところが、検察庁ではいっていました――「事情聴取のためにきてもらった第二組合員の人は『大斜坑道には、盃いっぱいくらいの炭じんしかありませんでした』といっていますよ」と。

後で聞いたことですが、検察官にせよ、私のところにきた若い鉱山保安監督官にせよ、三池大災害の実状調査に関係した人は、どこへ消えたのか、ほとんどいなくなってしまったというではないですか。おかしな話ですね。

×

三井独占資本がおかした重大犯罪は、いよいよ許すことができない。